

英語の言語変化に見られる規則化と一般化

矢野 安剛

はじめに

部外者ながら杉本先生のご退職記念号に一文を寄せる機会をいただいたことを嬉しく思います。

想えば、杉本先生とは大学英語教育学会（JACET）を通して知り合っただけで、随分と長い付き合いになります。国内外の学会やケンブリッジ大学やハワイ大学での数週間の夏期研修などと一緒に、楽しい思い出がたくさんあります。

なかでも、偶然互いにサバティカルでロンドン大学に在籍した1年間はよく覚えています。1990年でしたからかれこれ30年余り前になります。家族でいらっしやっていた杉本家にときおりお邪魔して、単身赴任だった寂しさをまぎらわせたものです。とりわけ、杉本先生のフィアットでウェールズでのイギリス応用言語学会に参加した時は、快く私の趣味に付き合ってくれて大小さまざまな城や城跡を巡ったのは楽しい思い出です。

杉本先生は、いかにも立教ボーイらしく、ハンサムで、人当たりが柔らかく、周りの者をリラックスさせ、楽しくさせる名人でした。NHKテレビの英語講座でもギターをかき鳴らしながらアメリカのポップソングを歌う姿をご記憶の方もいらっしゃるでしょう。ご趣味の卓球もなかなかの腕前でついに国際審判の資格もお取りになったそうです。

杉本先生は、このようにマルチタレントですが、本来は言語学者でピジンやクレオールの特権家です。現在はスコットランドのケルト系先住民のゲール語、とくにグラスゴー方言の研究に打ち込んでいられるようです。

私も同じ言語学が専門ですが、ここ 10 数年は「国際共通語としての英語」(ELF: English as a Lingua Franca) の研究に取り組んでいます。航空機などの交通手段の驚異的な発達によって、私たちは地球規模で頻繁に移動し、異言語・異文化の人々と接触します。また、コンピューターによる通信手段の空前の発達によって、日常的に大量の情報を発信し、受信し、意見を交わし、議論し、交渉します。その際のコミュニケーションには英語、アラビア語、中国語、スワヒリ語などの国際語が使われますが、なかでも英語の使用は突出しています。

国際共通語として使われる過程で英語はさまざまな言語・文化を採り入れ、修正され、変えられ、新しい形式・意味・用法を採り入れてきました。ある意味で、「高等ピジン」と言えるかもしれません。杉本先生のご専門と似たような研究分野です。そのような「国際共通語としての英語」について、私がここ 10 数年観察し、考察してきたことの一端をエッセイとして述べてみたいと思います。

英語は矛盾だらけ

私は長年英語教育を飯のタネにしてきたが、英語は実に困った言語である。不規則な形式や特殊な表現などの例外が多すぎる。

名詞を複数形にするには dogs のように dog に -(e)s を付けるんだよ、と教えるとやがて deer, fish, sheep など単複同形が出てくる。また、なんで規則的に childs でなく children なんですか、foots ではなく feet なんですか、knifes ではなく knives なんですか、oxes ではなく oxen なんですかと聞か

れると「象の鼻はなぜ長い？長いから長いんだ。覚えるしかない」と答えるしかない。逆に、不規則複数接辞を教えると「先生、one louse, two lice, one mouse, two mice ならどうして one house, two mice じゃないんですか」と来る。だから、不規則なのだ！ My family is very small であり、また My family are all night owls とも言くと教えると、family は単数扱いですか、複数扱いですか、どっちかに決めてくれないと試験の時に困ります、と来る。もっともな疑問だが、両方だと答え、学生を困らせるしかない。行為者接辞は -er をつけて表すと教えると、「でも beggar や liar は -ar だし、actor や editor は -or ですよ」と頭の良い子にいびられる。Worcester sauce と書いて「ウォーチェスター・ソース」ではなく、「ウスター・ソース」だし、同じフランス語から入ってきたのに restaurant の語尾の [t] は発音するが ballet や beret の語尾の t は発音しない。他人さまの言語だから勝手に規則通りに変えるわけにもいかない。英語教師はストレスが溜まる商売だとつくづく思う。

さらに、どうして shortbread がパンではなくビスケット（アメリカではクッキー）なのか、sweetmeats が肉ではなく、キャンディーなのか、sweetbreads が菓子類でもパン類でもなく、食品としての子牛か羊の胸腺か膀胱なのか、と聞かれるともうお手上げである。象の鼻は長いから長いのだ。風邪を引いて鼻水が出るのを My nose is running と言い、履きっぱなしの靴下が臭うのを My feet smell と言う。本来匂いを嗅ぐ鼻が「走り」、走るための足が「臭う」ってわけだ。もう勝手にしてくれ！

昔、ニューヨークのコロンビア大学で外国人に英語を教えたことがある。英語教育で修士号（ハワイ大学）をもっているという資格で、ネイティブとかノンネイティブとかにこだわらずに採用してくれたアメリカの大学のおおらかさに今も感謝している。生徒はポーランドから亡命してきたピアニストやトルコからきた医者とか多士濟々だったが、ある時 vegetable +

-arian で肉食主義者を vegetarian だと教えた時、くだんのトルコのおじさんに If a vegetarian eats vegetables, what does a humanitarian eat? Humans? と茶化されてしまった。医者には叶わない。

矛盾や複雑さの原因

英語がその言語形式、意味、機能においてこのような複雑さや矛盾を抱え込んだ原因はいろいろ考えられる。

第1の原因は地域差である。私たちは生まれ、育った言語社会でその社会の構成メンバーで共有されている社会的基準や文化的伝統とともに言葉を身につけていく。それはその社会独特の慣用句や比喩表現として学ばれ、家族、学校、職場でさらに強化され、内在化していく (Yano 2010)。たとえば、Their treatment of staff is definitely not cricket という発話の not cricket という表現はイギリス文化の伝統を知らないと理解できない。Getting rid of him will be a piece of cake の a piece of cake もアメリカの社会文化を知らないと理解が難しい。皆が一様に元祖イギリス英語、しかも地方方言や社会方言でなくいわゆる標準イギリス英語を話せば、私たち英語学習者にはどんなに楽なことだろう。だが、場所が変われば、文化も変わり、その表現も変わる。英語を母語としているイギリス、アメリカ、オーストラリアでさえ同じ概念や対象物を違った言葉で表現する。元祖イギリス英語の potato crisps が分家のアメリカ英語では potato chips と変わり、イギリス英語の potato chips がアメリカ英語では French fries に変わる。歩道はイギリス英語では pavement、アメリカ英語では sidewalk、オーストラリア英語では footpath である。それが、本家のイギリス人には面白くない。ロンドンに住んでいたころ、Where is the nearest subway station? と聞くと Do you mean the underground? と聞き返してくるし、Where is the elevator?

と聞くと Do you mean the lift? と聞き返してくる。ちゃんと subway も elevator も分かっているのに嫌味な人種だと思ったが、やはり、分家の分際でアメリカ英語が世界中で幅を利かせているのが気に食わないのだろう。ロンドン滞在中は客員フェローとしてロンドン大学教育学研究大学院にオフィスも貰っていたので 10 時過ぎと 3 時過ぎには tea break があり、ワゴンにコーヒー、紅茶、スナックなどを積んで回ってくるのだが、紅茶よりコーヒーを飲む教授の方が多かった。What happened to your British identity? と冷やかすと We are international! とのたまったものだ。学期に数回アメリカの著名な言語学者を招いて講演会を行うのだが、講演後のレセプションで講演者の居ないところで Did he speak English? と言って溜飲を下げていたのを覚えている。また、教授連中と pub crawling と言って酒場巡りをやったりしたが、ビールのグラスを重ね、ほろ酔い加減になると本音が出てくる。Americans speak American English. That can't be helped. But you, Japanese, here in London, speak American English. I can't stand it! アメリカ英語の普及が本家のイギリス人にはかなり腹に据えかねるということか。

母語話者ではないが、英語を日常的に使っているインド、シンガポール、ナイジェリアなどの「英語第二言語」地域でも、それぞれの地方の社会文化を反映して独特の表現が使われている。インフォーマルな表現で、取るに足らない人物 (an insignificant person) はイギリス英語では small beer、アメリカ英語では small potatoes だが、南アジア英語では small radishes と化する。東南アジア英語では、繊細なことを onion-skinned と言うし、cousin brother や cousin sister のように「いとこ」に性別を持ち込む。アフリカ英語では go to cinema のように冠詞が省かれるし、furnitures, informations, luggages のように不可算名詞が可算名詞に変わる (本名 2002, Kachru and Nelson 2006)。

第2の原因に、言語は接触する他の言語から表現を借用して語彙を豊かにしてきたことがある。英語のように数世紀にわたって様々な言語と頻繁に接触してきた言語においてはとくに顕著である。ざっと見ただけでも *symposium* はギリシャ／ラテン語から、*sky* はスカンジナビア語から、*ballet* はフランス語経由でイタリア語から、*Dachshund* はドイツ語から、*shish kebab* はトルコ語から、*jumbo* は西アフリカのリベリアのゴラ族語(?) から、*perestroika* はロシア語から、*intifada* はアラビア語から、*orangutan* はマレー語からというように実にいろいろな言語から表現を採り入れてきている。そして今はやりの *sushi*, *ramen* は日本語源である (Yano 2013b)。さらに、もし *Norman Conquest* で古フランス語の圧倒的な流入がなかったら、*beef*, *pork*, *mutton* は *cow meat*, *pig meat*, and *sheep meat* のように「食用動物+肉」と規則的だったかもしれないのである。

第3に、科学技術の革新も英語表現を複雑にしている。携帯電話 (*mobile phone* or *cell phone*) は *text* という語に、*Kids seem to be texting non-stop these days* のように動詞として「携帯電話でメッセージを送る」という新しい意味を加え、*Send a text to this number, please* のように名詞として、「携帯電話で送られたメッセージ」という意味を加えた。また、固有名詞 (会社名) である *Facebook*, *SMS*, *Twitter* などの *social networking services* がそれらの会社のサービスを使ってメッセージを送ること (動詞) や送ったメッセージ (名詞) として使われる。

My son is *facebooking* his girlfriend every day.

Jane *twitters/tweets* to him every day.

Where is the *twitter/tweet* you said you sent me yesterday?

I'm trying to send an *SMS*.

He *SMSed* her every day.

動詞の tweet はもともと小鳥のさえずりを意味するのだが、こうして新しい意味でも使われはじめた。ほかにも言語を複雑にする要因はいろいろあるが、ここではカットして次に進もう。

規則化への流れ

言葉とは時代とともに変化していくものだが、その変化を眺めてみると、そこには「規則化」(regularization)と「一般化」(generalization)の原理が働いていることが見えてくる。その変化には、その時代々の正しい文法や用法に疎い大衆が誤用をしたのが一般化し、正用法になった場合もある。たとえば、豆の pea だが、もともとは pease だった。だが、17世紀初期に文法に疎い一般大衆が pease の -se を複数接辞と勘違いし、単数を pea にしてしまった (*Oxford English Dictionary*, 2nd ed. 1989、以後 OED)。当時は明らかに誤用であったのだろうが、この誤用が普及し、やがて正用法となった。上腕の二頭筋、すなわち「力こぶ」の biceps も同様で、もともと単数形なのに、-s が複数接辞と勘違いされ、Your biceps are the large muscles at the front of the upper part of your arms (*COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*, 3rd ed. 2001、以後 COBUILD) のように複数扱いされる傾向にある。

さらに時代がくだっての例としては data や media がある。もともとラテン語源の datum と medium の複数形なのだが、それに疎い一般大衆が規則的複数接辞 -(e)s で終わっていないので単数形と勘違いしたと思われる。OED は、data については単に datum の複数形と述べるにとどまっているが、media については間違っ単数として使われているとして *American Speech* III. 26 (1927) から 2 つ例文を挙げている。イギリス人にとっては、アメリカ英語はなにかと間違いが多いのである。

It was finally decided to allot a definite *media* to each member.

One of the best advertising *medias* in the middle west.

しかし、21世紀に改訂版を出している *Longman Dictionary of Contemporary English for Advanced Learners*, 6th ed. 2014、(以後 Longman)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 8th ed. 2010、(以後 OALD)、*Shorter Oxford University Dictionary on Historical Principles*, 2 vols. 6th ed. 2007、(以後 Soud) などは、いずれも *The data is collected by trained interviewers* というような例を挙げてインフォーマルな日常の英語では *data* は単数形として使われているが、*These data are summarized in Table 5* のように保守的なフォーマルな英語やアカデミックな英語では複数形のままだと述べている。また、*media* に関しては、これらの辞書は、*The media is/are controlled by the government* のような例を出して、単複両方として使われていると述べるに留まっている。そこに OED, 2nd ed. (1989) が出版されてからこれらの辞書の改定版の出版までのおよそ 20 年の時の経過による識者・辞書編集者の認識の推移を見ることができる。上述の *pea* や *biceps* のように、当時の正用法に疎い一般大衆は規則的な複数接辞 *-(e)s* を当てはめて、結果的には規則化に寄与しているわけで、この「誤用」はだんだんとアカデミックな英語やフォーマルな英語にも浸透していき、いずれは「不規則な」形式を追放して正用法になっていくと思われる。

一般化への流れ

規則化とともに観察されるのが特殊な意味や用法が一般化する流れである。たとえば、*Sandwich*, *Band-Aid*, *Kleenex*, *Scotch tape*, *Sellotape*, *Xerox* のような特殊な製品の名前や商標だったものが一般化し普通名詞のように使

われる場合である。今や sandwich はそれを考案したイギリスの第4代サンドウィッチ伯爵とは関係なく、サンドウィッチ一般に使われているし、Band-Aid、Kleenex、Scotch tape、Sellotape、Xerox なども医療用テープ一般、ティシュー一般、テープ一般、コピー機一般に使われている。

また、terribly や terrific という語なども、「恐ろしい」という本来の意味から単なる「強意」を表す意味でも使われている。She's doing a terrific job と言った場合、「ひどい仕事」ではなく a good job の強調で「素晴らしい仕事」の意味であり、I'm terribly happy to see you は、会って「恐ろしい」のではなく「すごく」嬉しいのである。日本語の「恐ろしく暑い」とか「すごく嬉しい」などがもともと「怖い」の意味ではなく、単なる程度の強さを示すのと同様である。

無標化

この規則化・一般化を私は「無標化」(unmarking)と呼んでいる (Yano 2010、矢野 2013a, b、矢野 2014)。有標 (marked) が規則化・一般化によって無標 (unmarked) 化する傾向は以下のようなギリシャ語／ラテン語源の語の複数接辞の推移にも表れている (Yano 2007, 2013b)。

| 単数 | 複数 (旧) | 複数 (新) |
|-----------|----------|------------|
| corpus | corpora | corpuses |
| formula | formulae | formulas |
| syllabus | syllabi | syllabuses |
| symposium | symposia | symposiums |

OED は (rarely *symposiums*) と付記しているだけで、新しい規則化された

複数形には言及していないが、OALD、SOUND は新旧両方を記載している。さらに、OALD は *formula* と *syllabus* の場合、規則化された新しい形式 *formulas* と *syllabuses* をまず記載し、従来の形式 *formulae* はとくに科学的記述に用いられ、従来の *syllabi* は *less frequent* と付記している。Longman も *corpuses* or *corpora*、*formulas* or *formulae*、*symposiums* or *symposia* のように新形式を先に出し、より普及していることを示している。

辞書は、その時代々々の言語使用を記録し、整理・分類し、定義・説明する性格上、言語形式、意味、用法の時代に沿った変化を反映する。どれが正しくて、どれが間違いかは、言語学者や文法家や辞書編集者が決めるのではない。たとえ、その時代には文法的に誤用であっても、文法などに疎い一般大衆が使い始め、普及すればそれが正用法になっていくのである。したがって、*high* や *through* のような発音の変化についていけなかったスペリングがじょじょに *hi* や *thru* のような無標のスペリングに取ってかわられつつあるし、不規則な複数接辞 *corpora*、*formulae*、*syllabi*、*symposia* なども *corpuses*、*formulas*、*syllabuses*、*symposiums* のように規則化されつつある。将来は、*fish*、*knives*、*lice*、*men*、*oxen*、*sheep* などの不規則形も *fishes*、*knives*、*louses*、*mans*、*oxes*、*sheeps* のように規則化され、行為者接辞 *-ar* や *-or* も *-er* に統一されることは十分に予測しうる。

母語話者として内在化するにせよ、第二言語話者や外国語話者として意識したままにせよ、私たちは規則によって言語を学び、使う。規則的であればそれだけ学びやすく、使いやすい。規則的であるに越したことはないのである。上述の *data* と *media* にしても、辞書の最近の改定版では、すでに単数扱いに対して '*North American*' とか '*informal*' とかの但し書きが消えている。これは、規則的な無標形が科学技術やアカデミックな分野にも普及し、また、イギリス、北アメリカ、オーストラリアなどの地域差も超えて、あらゆる場で使われ始めていることを示している。本来の単数形

datum と medium が消滅し、data と media が単数形となり、複数形は datas と medias になるのは時間の問題であろう。

このように、言語形式や意味や用法の規則化は新製品やイベントや物事の名称に使われたり、インフォーマルな日常的な場で使われはじめ、誤用も含め、じょじょに進んでいくであろう。一方、不規則だが伝統的な形式や意味や用法は科学・技術の分野やアカデミックな分野のような特殊な場やフォーマルな場で当分は再生産されながら残っていくと思われる。このような新旧共存の時期を経て、規則化・一般化が進んでいくのではないだろうか。

参考文献

- COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*, 3rd ed. (2001) Harper Collins.
本名信行ほか編 (2002) 「アジア英語辞典」(三省堂)
- Kachru, Y. and C. L. Nelson (2006) *World Englishes in Asian Contexts*. Hong Kong University Press.
- Longman Dictionary of Contemporary English for Advanced Learners*, 6th ed. (2014) Pearson Education.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 8th ed. (2010) Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1989) Oxford University Press.
- Shorter Oxford University Dictionary on Historical Principles*, 2 vols. 6th ed. (2007) Oxford University Press.
- Yano, Y. (2007) English as an International Language: Its Past, Present, and Future. In Michiko Nakano, ed. *On-Demand Internet Course Book: World Englishes and Miscommunications*. Tokyo: Waseda University International, 27-42.
- Yano, Y. (2010) Culture-specific or Culture-general? Cultural Differences in English Expressions. *Philippine Journal of Linguistics* 41, 135-151.
- 矢野安剛 (2013a) 「翻訳における付加と削除」『日本語とジェンダー』 Vol. XIII, 46-57.
- Yano, Y. (2013b) Universal Language Change: Toward More Regular and More General.

In English Teachers' Association-Republic of China, ed. *Selected Papers from the Twenty-second International Symposium on English Teaching*. Taipei: Crane Publishing, 110-120.

矢野安剛 (2014) 「日本語の英訳に見る照応詞の扱い：星新一『ノックの音から』」『日本語とジェンダー』 Vol. XIV, 2-3.